

知心流刀法

知心流は戦国時代末期に、播磨の郷土佐々倉家が鎧組太刀を中心に刀法・骨法の流派として興った。戦国大名の松平清康公との縁で、佐々倉家は松平姓と葵紋を賜り、寛永年間に流祖となる松平清信によって「知心流」が始まったとされる。遠祖を新田義宗と云い伝えがある。が定かでない。

江戸時代初期の初代より十二代まで、佐々倉松平家が葵の紋とともに播磨（兵庫県）の地で一子相伝を頑なに守り通してきた。他家からの要請などにより剣術指南に応じて、多くの武家屋敷に出稽古された記録が残っている。

また白河（福島県）黒森一帯にある松平家飛び領地には江戸初期より「黒備松平党」と称し、裏の知心流として修行、本家の大事に備えていた。

明治・大正期は士分として播磨、白河の領地は安堵されたが、生活の為に流派を残すための剣術興行、他流仕合などには武家の矜持に反する行為として一切拘ることを禁じ、流派の掟の中に「見世物小屋掛けの類いに出で申すまじきこと」と残された。

昭和に入り十三代となる松平正親は、太平洋戦争において京都大学より学徒出陣、陸軍中野学校を経て七本の刀を携えて戦地に赴いた。戦後は武道禁止令により刀法の伝承ができない中、知心流の骨法（空手に類似）を大学で指導している。禁止令が解除されてから昭和四十九年まで、東京原宿の日本体育協会の体育館などで本来の刀法指導が定期的に行われた。体育系の教授となった門下生が多く育った時期でもある。

現在の十四代宗家は、この稽古場の最後の門下生。

調布柴崎道場は十三代宗家と直門の相伝家などと昭和四十九年に開設した。刀法、居合、鎧組太刀、骨法などの奥義を古来の方法で定期的な稽古が続いた。

平成二十四年に、十三代宗家が五十年の伝承を終え、この柴崎道場の稽古を最後に亡くなった。男子に恵まれなかったため流派の慣わしにより、相伝家の松平壽正（本名明石久雄）をもって後継の嫡流家とした。道統すべてを引き継いで十四代嫡流宗家として現在に至っている。

世田谷成城道場は宗家指導のもと、後代嫡流者が中心になり平成二十四年に知心流の事務局、茶室のある成城に開設された。

平成二十六年には柴崎道場開設四十周年を迎え、稽古場である光照寺境内に知心流先祖の鎮魂のための石碑が建立された。

〈 掟 〉 其の1 （知心流第十三代宗家 指示書より）

剣の道とは大事に臨んで生死を明らかにすることなり

- 一、生命を尊び 死を恐れることなかれ
- 一、士道、士魂に背くことなかれ
- 一、理由（ことわり）の如何によらず私の争いをなすべからず
- 一、自流、他流を問はず 仕合うべからず
- 一、見世物、小舎がけのたぐいに 出で申すまじきこと
- 一、細心の注意を怠らず 大事に会して不動たるべし

上の条々、神明に誓って相違無之候也

昭和 52 年 10 月 9 日
東京上野・東叡山寛永寺
戊辰殉難者慰霊祭

半世紀前の記録より

……………【武門を司る家柄】として
追悼演武を行なう。

祭 主・徳川恒孝（徳川宗家）

委員長・松平保定（会津家）

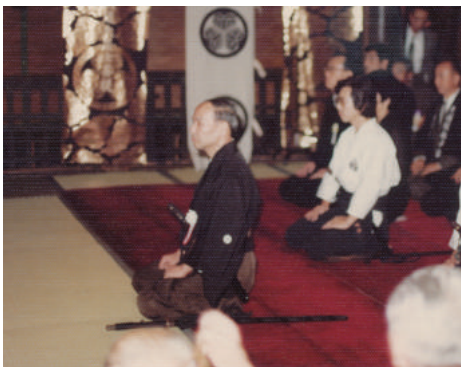
副委員長・徳川義宜（尾州家）

参 与・徳川宗敬、徳川圀斉、伊達貞宗、南部利英、上杉隆憲、酒井忠元、榊原政春、
久松定武、酒井忠明、松平頼明、松平定康、堀田正久、阿部正友、丹羽長聰、
松平忠晃、牧野忠昌、相馬和胤、秋田一季、安藤綾信、板倉勝宏、青山幸高、
竹腰正夫、水野勝邦、南部信克、奥田直栄。

顧 問・松平勇雄、松平正敏、永井 良、松平正親（知心流松平家 13 代）（敬称略）

追悼演武（本堂）

・知心流松平家 13 代宗家 松平正親
相伝家 松平壽正（14 代宗家）



武術を伝承している知心流松平家が
本堂での追悼演武（13 代と 14 代）



焼香する松平保定、徳川恒孝、徳川義宜の 3 氏



挨拶する知心流・林榮太郎顧問

昭和52年（1977）10月9日、上野・寛永寺で「戊辰殉難者慰霊祭」が執行された。これは戊辰の年（1868）東軍（旧幕軍サイド）として散華した人々の霊を鎮魂せんと発起したもので、徳川恒孝氏（つねなり・徳川宗家）を祭主に、松平保定氏（もりさだ・松平本家）を実行委員長に推薦いたし、旧藩主の子孫の方々が参集されました。

松平先生は家中を挙げて慰霊祭に参加せらるる宣言せられ、自らも顧問に就かれました。さらには追悼演武をもって、慰霊の証しとされる意思を表明されました。

このとき、知心正統派刀流宗家十三代嫡流松平正親先生を師範として、前備相伝家明石久雄氏、増沢真氏、進行は林により、五行剣、約束組太刀が演武せられ、ラストに試斬り二本が展開されたときは、満場息をのみ、一瞬の静寂が辺りを支配致しました。もっとも慰霊にふさわしい追悼演武でありました。（ 林 榮太郎 ）



歴史

写真は播磨の松平屋敷（邸内公開時）と道場のあった奥ノ院。
 知心流の武術はこの地で戦国桃山時代から昭和の初めまで伝承された。戦後、屋敷の取り壊しの際、一部が郷土の資料館に寄贈された。
 右上の写真は代々の宗家がお祀りしてきた南北朝時代の板碑。梵字と当時の年号が彫られている（14代宗家保管）
 また松平家の飛び領地だった白河の山中には新田義宗公の墓標がある（右写真）



【武門をつかさどる家柄】

幕末の戊辰戦争の幕府の戦没者慰霊祭（徳川将軍家菩提寺・寛永寺）が昭和 52 年に行われた。祭主が徳川宗家、実行委員長が松平本家で、東軍の末裔 450 名が集い 7308 柱の霊を慰めた。（写真は歴史読本新年号より）
 知心流の松平家は松平一門で唯一武術を伝承していることから本堂で慰霊を前にして追悼演武を行なった。演武は知心流 13 代宗家松平正親師範（背中）と 14 代松平壽正。



【伝承拠点が東京に】 知心流本拠地は、太平洋戦争や武道禁止令などもあり戦後、播磨の屋敷や道場が失われた。そのため 13 代宗家は東京調布に居を構えて骨法を、武道禁止令解除後は日本体育協会内で刀法を伝えた。昭和 49 年、調布の光照寺と旧柴崎村の好意もあり、のちの 14 代宗家と共に光照寺境内の建物での稽古が始まる。稽古開始 40 年を記念して境内に石碑が建立されている。（碑銘表 / 知心流中興之地 裏 / 建立者名）



〈 知心流松平家発祥の地 〉

戦国時代の知心流発祥の地、西山ノ庄（兵庫県）は山、湖、田畑を含む一帯の庄で陣屋、砦などが点在していた。明治までこの地を守り通した。地元の人々は西山のお殿様を、恐れたり、親しんだりした唄が残っている。

江戸期の道場稽古は主に庭先で行い、常に素面で脇差を帯び、刀と同等の重量のある木剣にて約束のない自由組太刀の剣術稽古を中心とし、戦国の戦法である小太刀、骨法も伝承されている。

江戸時代の門弟は格式による選別があり、武門を司る家柄としての入門許しは上級武士の子息などに絞られていたという。刀法を重んじ、矜持をもって向き合い、基本の奥深い「面斬り 10 年」を大事とした。幕末に江戸で流行した袋竹刀、防具などは―― 地方の道場であったからか ―― 使われた記録がない。これは現代でも昔のままを貫き、当流では採用していない。



伝承

刀 法

献酬の儀

鎧組太刀

自由組太刀

剣術・木刀組太刀

居合・抜手剣

投 剣

小太刀・薙刀

試斬り

骨 法

実戦刀の拵(こしらえ)



〈流名 / 相傳之事〉

刀 法 嫡流宗家での名称は時代により知心流 / 知心正流 / 知心正統派刀流など。また、裏知心 / 黒備松平党。相伝においては剣術を主とし、抜手剣、居合、投剣、鎧組太刀、小太刀、骨法ほかが伝承。伝位は初傳、中傳、奥傳、秘伝之位に大別される。

骨 法 聖覚院流八之手、正統傳武道聖覚院流八之手、が古文書に見られる。後年、刀法に統合されている。

相伝家 松平宗家の分家格式を持つ。四方に備える前後左右の各相伝家のほか居合、刀法、骨法の相伝家が見られる。

分 流 知心不動派刀流、知心残心派刀流、知心流居合等、いずれも一代限りの許しで後継は認めていない。



東京調布・光照寺境内。石碑前での演武



演武

稽古

合宿

調布柴崎道場

世田谷成城道場

西調布体育館

河口湖・合宿

茶室・自在庵

工房・拵 塾



〈風姿花伝 / 世阿弥著より〉

秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。

（中略）

一代一人の相傳なり。たとひ、一子たりと云ふとも無器量の者には傳ふべからず。

「家、家にあらず。次ぐをもって家とす。人、人にあらず。知るをもって人とす」と云へり。

（伝承について世阿弥の解釈と同意義の心構えが知心流宗家に残されている）



茶の湯

伝えられている茶刀を帯び、立て膝で茶に臨む。（東京国立博物館・茶室）



茶の湯研修所（成城）



茶刀＝武家が茶室で帯びた木刀（復元）



野点茶会（東京調布の光照寺）



美術の講義開催（応挙館）



東都雅楽会協賛で雅楽と共に茶の湯を味わう（九条館）



知心流松平家の伝統を支える…… 一般社団法人 武家武道文化伝承保存会

知心流松平家に伝わる刀法、武術、遺産の数々を後世に残すべく、その継承と存続を支援することを目的に、平成 24 年に「一般社団法人 知心流居合・刀法」が登記された。平成 30 年に松平家伝来の武家様式、茶の湯の心得、仕草など、文武を併せて伝承できる環境を安定的に整えることを目的に加え、現在の名称に変更された。

〈 保存会の理念と目的 〉 抜粋

- ・ 武家の武道と文化を通してあらゆる年齢の人々とその社会に貢献する。
- ・ 私たちの生きてゆく社会環境に合わせた体づくりと夢と活力を提供する。
- ・ 後世を担う武家武道の指導者を育成する。
- ・ 茶の湯など本来の姿を子孫に届ける。

明治時代以降、西洋化によって、伝統的な武道、文化が変化し本来の素朴な基本が伝承しにくくなっている。当会では、江戸期には当たり前だった仕草や体の働きを基本に、また崩さないように、伝えられている武術や茶の湯などを通して、日本人として日本で生まれ育ったこの技を、世代を超え共に育て、伝え、自立した武士道を百年、二百年後の子孫に届ける。

知心流・松平家の当主

時 代	嫡 流 宗 家	記	継承者と伝承地
安土桃山	三河松平家七代当主松平清康公より 武門の功績により播磨の佐々倉家に松平姓と葵紋を賜る（知心流・松平家の前身）		
江戸時代	初代、松平清信 松平為之 松平為利 ・判読 ・不明	・江戸幕府 ・刀法を司る家柄として剣術・知心正統派刀流と骨法・聖覚院流八之手。を伝承。 ・播磨（兵庫）の天領地にて屋敷と道場を構える。	佐々倉左馬弼源清信（播磨） 木崎源左衛門尉為之（白河）
明 治	7 代、松平鎮信 8 代、松平鎮清 9 代、松平鎮正 10 代、松平清之 11 代、松平清次 12 代、松平清治	・福島白河の飛地（黒森一帯）に裏の知心流松平家。 ・西國探題 1 万 2 千石 ・大樹院松平家 ・明治維新 土族として同地（縮小）と静岡に新領地。	裏知心の木崎家が 6 代まで継承（播磨）
大 正		・佐々倉家次男（今泉家に養子）が 13 代を襲名 ・太平洋戦争、武道禁止令等により播磨屋敷、道場が消失。播磨は国に返納。白河飛地は安泰。 ・札幌オリンピック時、会場で松平家の武道を紹介。	佐々倉清次（播磨） 佐々倉清治（播磨）
昭 和	13 代、松平正親		今泉廣務（東京調布）
平 成		・上野寛永寺にて幕府軍を代表し本堂で追悼演武。 ・増上寺末寺の東京調布、光照寺に道場を開設。 ・同地境内に知心流中興之石碑を建立。 ・知心流相伝松平家の明石久雄が 14 代宗家を継承。 （明石家先祖は播磨の豪士。備前、美作（岡山）に） 複数の城を有した 4 万 6 千石の戦国大名。 ・平成御代替りを記念し 日光東照宮奥社宝塔前で知心流松平家が誓詞奉納演武を行なう。	明石久雄（東京調布） （東京世田谷）
令 和	14 代、松平壽正		

〈白河の飛び領地〉

戦国時代、万が一の備えとして、離れている一族と互いの領地の一部を交換したという。白河の黒森一帯の地は、播磨の西山庄松平家の隠し領地であった。西之郷湖月坂松平氏と呼ばれ、知心流開祖代の、松平為之（木崎姓）、為利（同）が隠し領地を飛び領地として預り、裏知心と呼ばれる黒備松平党と称し護っていた。

知心流先祖のうち開祖代と記述されている三名がすべて黒備松平党の出である。関ヶ原の戦いで播磨の松平一族に何が起こっていたのか、残念ながら記録が見つからない。が、三名の一人、松平清信（佐々倉姓）が、江戸時代初期に西山庄松平氏と記述されているのがあり、本国領地とともに同地がそのまま残ったものと推測できる。

江戸時代の知心流六代目もこの地の出身と推定される記録があるが、それ以降は本国の播磨でのみ宗家嫡流が継承されている。この黒森には、知心流遠祖とされている新田義宗公の墓所があり、五輪の塔など六基がこの地に残されている。また近年では十三代により戊辰役東軍戦死者供養碑、知心流先祖鎮魂碑が建立された。合宿所も 14 代を中心に建設された。

近年の主な記録と活動

- 昭和 36 年 東京小金井市で十三代宗家による知心流刀法の指導が復活。
- 昭和 39 年 武蔵大学武道師範として十三代宗家による空手（骨法）の指導。空手部師範。
- 昭和 42 年 スポーツ百科事典（大修館）に武道に関する執筆者として十三代宗家が記述。
- 昭和 43 年 日本体育協会内で十三代宗家による知心流刀法の本格的な指導が始まる。
- 昭和 44 年 西ドイツスポーツ科学研究所が来日。知心流の演武を 16mm フィルムにて収録
- 昭和 46 年 札幌オリンピック記念行事、歓迎式典にて日本武道模範演武を行なう。
- 昭和 49 年 東京調布に相伝家道場が発足し、のちの十四代宗家の指導が始まる。
- 昭和 50 年 松平家の飛び領地（白河）の松平山荘にて、合宿が年 2、3 回定期的に始まる。
- 昭和 52 年 東叡山寛永寺（上野）にて戊辰戦争慰霊祭が執り行われ、追悼演武を行なう。
（祭主 / 徳川宗家・徳川恒孝氏、実行委員 / 松平本家・松平保定氏）
- 昭和 63 年 東京大学柳生流同好会の演武会にて、招待演武を行なう。
- 平成 2 年 日本伝統武道連盟の発足大会（福岡）で招待演武を行なう。
- 平成 3 年 日本中学校体育連盟剣道同好会の古武道師範として参画（体協内で稽古始まる）
- 平成 7 年 東京成城の事務局内に茶室が完成。門下生の茶の湯稽古が始まる。
- 平成 14 年 幕末史研究「三十一人会」30 周年記念式典にて招待演武を行なう。
- 平成 16 年 白河の合宿所が完成。完成披露と野点茶会を執り行なう。
- 平成 20 年 玄制流空手世界大会（東京）にて招待演武を行なう。
- 同年 東京国立博物館・茶室（九条館 / 転合庵）にて調布道場 35 周年記念茶会を開く。
（協賛・東都雅楽会 / 雅楽全国協議会世話人・大津山高氏）
- 平成 23 年 知心流居合刀法 のホームページを開設。
- 平成 24 年 十三代宗家・松平正親先生逝去（87 歳）。相伝家の松平壽正が後任となる。
- 同年 成城道場を開設。（世田谷区砧総合支所 / 成城ホール）
- 平成 25 年 社団法人 知心流居合刀法 登記。
- 平成 26 年 知心流ブログ「不動知心」を公開。
- 平成 27 年 知心流先祖の鎮魂碑ならびに中興の石碑を建立（東京調布 / 光照寺境内）
- 平成 29 年 十四代松平壽正宗家の古稀記念行事を行なう
（記念演武会 / 西調布体育館、記念茶会 / 東京国立博物館茶室、祝賀会 / 深大寺）
- 平成 30 年 社団法人 武家武道文化伝承保存会に改称
- 平成 31 年 日光東照宮奥社宝塔（家康公墓前）にて創建以来初めての誓詞奉納演武を行なう。
……………読売新聞、地元の下野新聞一面に大きく報道された。
- 令和 元年 文化庁の「日本博」プロジェクトに武家文化を伝承する試みを申請。

〈文化活動〉

- ・ 武士の茶の湯会 東京国立博物館・庭園茶室にて 80 ～ 100 名の茶会。（平成 18 年より毎年秋に開催）
- ・ 雅楽に親しむ会（平成 19, 20, 21 年）
- ・ 江戸時代の建物と絵画の講義（平成 24 年国立博物館・応挙館にて二科会・松室重親画伯を迎えて）
- ・ 刀の拵（こしらえ）教室の定期的開催（平成 12 年より随時、29 年より制作教室を毎月開催）
- ・ 野点茶会 東京調布の光照寺境内、しだれ桜の時期に毎年開催（平成 27 年より）

〈知心流伝書・記録写真集・記念誌〉

- ・ 忘備録 / 和綴じ / 13 代宗家による家伝書のまとめ。
- ・ 御旗心得 / 折紙 / 宗家幟旗、旗指に対しての心得。
- ・ 松平正親先生聞書 / 和綴じ / 極意書 / まとめ林榮太郎。
- ・ 13 代宗家古稀記念誌 / 和綴じ / 50P / 相伝家編。
- ・ 14 代宗家古稀記念誌 / A4/129P / 記念誌編集委員会編。
- ・ 知心流松平家 / A4 変形 / 武家武道文化伝承保存会編。
- ・ ビデオ / 札幌オリンピックセレモニーの演武。
- ・ ビデオ / 西ドイツ（当時）の正親師範 16 ミリフィルム。
- ・ 松平正親師範追悼演武記録写真集 / A4。
- ・ 知心流調布道場 35 周年記念茶会写真集 / A4。
- ・ 白河合宿所建設記録写真集 / A4
- ・ 東京柴崎道場 40 周年記念写真集 / A4。